

独創があった、と著者は述べる。

柳の理論に、東洋で再生産されたOrientalismの突出した典型を見る著者の論証は、英語圏では高く評価されるだろう。ただし脱植民地主義の立場から、植民地主義時代の思想を一方向的に断罪する姿勢には、おのずと限界もあろう。日本賞賛の日本研究は、とかくnationalisticな本質主義として批判されがちだ。だが逆に、日本の文化英雄を批判することで自らの正当性を主張する議論は、欧米の批判理論への追従と指弾されかねない。非西欧側からの脱植民地主義が、言説の水準での欧米中心主義への迎合を招くならば、皮肉な事態だろう。著者の標榜する複数性が、実際には現今の英米学術界の価値観や理論への隷属と裏腹だったならば、これは遺憾だろう。

だかかかる二律背反を不可避の代価として背負いつつも、本書が達成した理論的・文献学的貢献の質量は侮れまい。手放しの礼賛でも、全面否定の罵倒でもない柳思想の再評価と、立場の違いを超えた健全な学術的論争こそ不可欠だろう。英国の首都での討論会の成果報告が鶴首される。

\* Yuko Kikuchi, *Japanese Modernisation and Mingei Theory, Cultural nationalism and oriental Orientalism*, Routledge Curzon, 2004

重の価値観に対する対抗言説を認める解釈が多い。民藝の価値観に共感するにせよ、反発するにせよ、どちらにも共通して、そこに、日本の美意識あるいは東洋美学の精髓を見て取ろうとする傾向が濃厚だった。

菊池氏の著作は、こうした解釈が生成された歴史的経緯を丁寧に文献的に洗い直す。柳らによる朝鮮陶磁器の再評価は、結果的に今日に至る韓国美術史学の陶磁研究の大枠の形成に貢献した。だがこの貢献は、韓半島や琉球、アイヌ或いは台湾の美的価値の「発見者」を自負する柳の「傲慢さ」を正当化するものではない、と著者は批判する。また柳の思想が東洋美学の代表に納まるのは、戦後、英国のダーティントンでの講演(1952)の成功以降であり、ここには鈴木大拙の禅仏教思想の影響が顕著なことも指摘される。さらに一般に柳独自の思想とされるクラフト観にも、むしろウィリアム・モリスやラスキンから若き柳が汲み取った要素が多い。だが後年の柳は、そうした影響を矮小化した。著者はその痕跡を、柳の富本憲吉との確執に探り当てる。結論として、柳の中世主義は、正統な東洋の伝統というより、むしろ近代特有の東西折衷思想であり、雑種的hybridに日本文化本質論を練り上げたappropriationにこそ、柳の

連載 91  
東洋的オリエンタリズム  
脱植民地主義からみた「民藝」批判

西洋近代の構築としての理想的「東洋」とその極東の展開

国際日本文化研究センター研究員・総合研究大学院大学教授  
稲賀繁美

柳宗悦の民藝理論を、国際的視野から総括する時期がやってきたようだ。2006年9月9日には、大英博物館で「民藝：二十世紀のクラフトー日本と英国」と銘打つ1日のワークショップが開催され、日英の第一線の研究者が参加した。この会議でも発表した菊池裕子氏は、民藝理論を脱植民地主義の立場から批判的に分析した英文著作を2004年に刊行している。すでに英語圏では、柳宗悦研究の基本的文献としての評価を勝ち得ている。著者はそこで、従来の欧米中心の範例には還元されない、いまひとつの代替的な、非欧米的モデルを提示して、複数の近代および近代美術を捉唱しようとしている。目論見はどこまで達成され、いかなる課題を今後に残しているのだろうか。

従来の海外での民藝評価を見ると、東アジアと欧米とで評価に落差があった。70年代の韓国では、柳の朝鮮藝術論を、植民地主義者による家父長的な温情主義の産物として糾弾する姿勢が顕著だった。柳の審美主義を道徳性の欠如として拒絶する、いかにも儒教国家らしい解釈さえ根強い。柳やその盟友の陶藝家バーナード・リーチは、無名の職人藝による無垢の美を高く評価した。英米圏ではここに、西洋アカデミーの個人主義、傑作主義、独創性尊

思  
考  
の  
際  
景